

# こころ、からだ、いのち

中野 重行

大分大学名誉教授/大分大学医学部創薬薬医療コミュニケーション教授/  
国際医療福祉大学大学院 特任教授 (創薬薬医療分野長)

## ●コンピュータがもたらした恩恵

現代社会では、いまやコンピュータの恩恵を受けることなくしては仕事ができなくなっています。コンピュータを無視しては、普通に生きていくことさえ苦勞することになります。子供の頃、白黒テレビの試作品が出現したかと思うと、またたく間に一般家庭に普及し、また、家庭にあった黒い固定電話が携帯電話に変わって身近な必需品になっていったことを体験してきた世代の人間にとっては、格別の感慨を抱かざるを得ないのです。若い頃、英文タイプライターで論文を書いていた人間からみると、現在のパソコンのワープロ機能などといった文明の利器の便利さは、夢のような恩恵と思わざるを得ません。パソコンなどの技術革新は、私どもの「書く」という作業を、とても楽なものにしてくれました。

さて、そのようなコンピュータとそれを使う人間の本質的な違いはどのようなことなのでしょう。コンピュータと人間は、機械と生物の話ですので、基本的な構造が違うのは当然です。そこで、機能の方に焦点を当ててみたいと思います。最大の違いは、何と云っても、コンピュータでは蓄積された記憶を

簡単にコピーして、他のコンピュータに移転することができることです。しかし、人間は一人の人間の中に蓄積された記憶をコピーして、他の人に移転して、すぐに同じ働きができるようにすることはできません。それまでに記憶した知識、身につけた技能、培ってきた想いや態度は、その人一代限りのものです。だからこそ、「人間国宝」などが存在して、高い価値を持ち、社会の尊敬を受けることになるのです。

## ●人間の自己修復力

一方、コンピュータに比べて人間の機能として目立つ特徴は、「自己修復機能」があることだと思います。医療の世界では、人間の持つ「自己修復機能」あるいは「自己修復力」は、古くはギリシャ時代から「自然治癒力 (vis medicatrix naturae)」といわれてきたものに相当します。ギリシャ時代の医聖ヒポクラテスは、病気の治療も自然に従うことによるのみ目的を達するのであって、自然は本来「自然治癒力」を持っており、「病気を癒すのは自然である」としています。このような考えから、治療の正道は、局所的、対症的ではなく、全身的、抜本的でなければならぬとするヒポクラテス医学の根本思想が生まれたのです。筆者が初めてヒポクラテスのいう「自然治癒力」というコンセプトのことを知ったのは、医学生時代でした。あることをきっかけにお世話になるようになった故 澤潟久敬 (おもだか ひさゆき) 先生 (当時は大阪大学医学部医学概論教授) に教わったのです。澤潟先生は、その後、筆者の医哲学領域における恩師になりました。

私どもの生体に自然治癒力が備わっていることは、外傷や感冒の治療過程を想像してみるだけでも容易に理解できます。高度な外科手術といえども、生体の有する「自然治癒力」を根底において初めて成り立つ治

連載②

自然治癒力と

ポスト・トラウマティック・グロース (外傷後成長PTG)

人間の有する自己修復機能の驚嘆すべき力

療法です。生体にメスを入れるのは外科医であり、縫合するのも外科医ですが、傷口がくっついて治るのは生体の有する「自然治癒力」のおかげです。ヒポクラテスの功績は、それまでの迷信的な医療のあり方を、観察と記述を重視した医学に変えようとしたこと、と同時に医師に厳しい修練の必要性を唱えたことですが、彼は「自然治癒力」を正しく認識していた人物でもあります。私どもは、現代医学の目覚ましい進歩に目が眩んで、本来生体に備わっている「自然治癒力」を軽視しがちになっていますが、いま一度医療の原点に立ち戻って、「自然治癒力」を重視した医療のあり方を考える必要があるように思います。その意味でも、ヒポクラテスは現代でも、私どもの「師」であり続けているように思います。

## ●「こころの成長」と「目利きの勘」

さて、「自然治癒力」は身体だけでなく、心の面でも認められます。大きな心の傷 (トラウマ) になるような衝撃的な出来事を経験した後の障害は、「外傷後ストレス障害」(posttraumatic stress disorders: PTSD) と名づけて、医療関連記事にもよく出てきて注目されています。しかし、反対に、人間は外傷体験を契機にして成長することもあるのです。これを、「外傷後成長」(posttraumatic growth: PTG) と称しています。人生における大きな危機的体験や非常に辛い衝撃的な出来事の後で、前より成長するのです。傷ついた人がただ元に戻るのではなく、前よりも、肯定的な変化、成長がみられるのです。それは、「こころの成長」です。人としての深い面での成長です。大きな困難と心の傷を乗り越えたからこそ成長です。鍛えたと磨かれる人間の「こころ」が、そこにはあります。

もう一つ、人間がコンピュータよりも優れていると思われる特徴として、熟練した人間の「直観力」を挙

げることができるのではないのでしょうか。「直観力」は人間の有する「感性の働き」ですが、ある道に精通し、熟練した人間には、多くの知識の広がりや深まりが根底にあって、こころの無意識の領域に蓄積されてきた記憶 (したがって、頭で覚えているというのではなく、むしろ身体が全体として覚えていて反応するような感じ) が、働いて生ずるもののように思います。つまり、鍛えられた「目利きの勘」の凄さです。長年の「からだ」で覚えたものが、知識の広がりや深まりと相まって、感性がさらにより上のステップに導かれるといった感じですね。

例として、天動説から地動説への「コペルニクスの転回」を挙げることができるかと思います。地動説とは、地球が太陽の周りを廻っているという学説ですが、地動説を唱えたコペルニクスが登場するルネッサンス以降の16世紀まで、地球は宇宙の中心にあり、周りの天体が動いているという天動説が信じられてきました。地球上に住んでいる私どもにとって、地球は止まって見えるのだから日常生活に関する限り、天動説で特に不自由はなかったのです。しかし、知識を深めてより深く考え、かつ感じることでできるようになった人の感性にとっては、おかしいと感じることが存在したのです。火星などの惑星の動きを説明しづらいことなどですが、コペルニクスは1543年に没する前に、思索をまとめた著書を刊行し、地動説の測定や計算方法を記して、誰でも同じ方法で1年の長さや、各惑星の動きを測定できるようにしたのですが、コペルニクスの発表から半世紀以上経っても、はっきりと地動説を支持した天文学者は、ケプラーとガリレイの2名のみであったといわれています。自分の発見した真理の前には、宗教も、大衆をも恐れることのない心境にまで達したという例は、人間の能力の大きいなる可能性を示しているのではないのでしょうか。

なかの・しげゆき 岡山大学医学部

卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理学部門に留学。大分医科大学臨床薬理学教授、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授、大分大学医学部創薬薬医療コミュニケーション教授、国際医療福祉大学大学院教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員 (元理事長)、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員 (元会長)、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、臨床試験支援財団理事長。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ (大分、岡山、東京、長崎、山形、湯布院) の企画・運営に携わっている。  
[http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical\\_medicine/index.html](http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/index.html)

